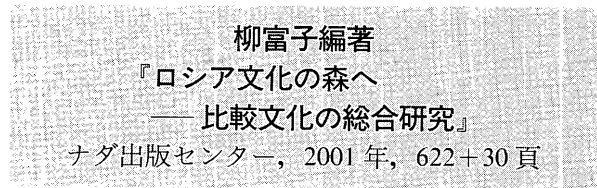


かもしれない。これは本書の著者がそれだけの情熱をもって研究し、それだけ豊富な内容を提供している証拠である。これは論評の余地もない学芸会的パフォーマンスを「研究発表」と称して二日にわたって行ったり、それを許したり、学会の最高成果を掲載すべき学会誌を学芸会の記録で充満させている本学会の現状に対する無言の批判になっている。私があえて長すぎる書評を書いたのもその故である。

著者は「あとがき」で「今回の出版には、より重要な研究の出発点となる可能性が含まれている」と述べている。本書はそれ自体でも一定の価値をもつものではあるが、著者がこれまでの着実真摯な研究を持続すれば、今後さらに多くの成果が期待される。著者は今その夢にむかって努力しているとのことだが、われわれは著者により夢を願うばかりでなく、幾分かでもその夢を共有することができれば幸せである。

(ふじぬま たかし・創価大学)



栗 原 成 郎

比較文学は日本では戦後に“公認”された（「日本比較文学会」の創立は昭和24年）比較的若い学問分野であるが、早稲田大学文学部には創設以来、坪内逍遙を源泉とする、和漢洋をひとつの視野に収めた巨視的文学研究の精神の脈脈たる流れがあり、すでに戦前において吉江孤雁、本間久雄、日夏耿之介、柳田泉、片上天弦らの文人教授が、英文、仏文、独文、露文、国文、中文といった個別的な国家ないし言語圏の文学の枠にとらわれない比較文学・超域的総合文化の研究の途を切り開いていた。しかし吉江孤雁を首導とする共同の世界文学研究の志向が実を結ぶのはようやく戦後になってからであり、吉江教授の衣鉢を継ぐ仏文の佐藤輝夫教授の熱意と努力によって昭和29年度に大学院文学研究科に「比較文学」の講座が設置され、昭和37年には「比較文学研究室」が文学系諸学科の共同運営の形で開設され、昭和40年に機関誌『比較文学年誌』が創刊された。

「早稲田大学比較文学研究室」は、その発足にいたるまでの過程には紆余曲折があったことが窺われるが、客観的に見て、船出後は順風満帆に進み、研究例会と機関誌を発展の足場として、(1)資料研究、(2)理論研究、(3)対比研究、(4)影響関係・受容史研究、(5)総合文化論の比較文学の各研究領域において着実に重要な業績を産出し、独自の学風と学統を形成するにいたった。それらの業績を具体的に示すことは本書に収録されている編著者執筆の「早稲田大学比較文学研究室の歴史」【目次は「比較文化研究室」となっているが、これは誤植】および別の文章に譲るが、比較文学へのロシア文学側からの最大の貢献は、編著者が謙虚さゆえに一言も触れることのなかった御自身の著、すなわち柳富子『トルストイと日本』（早稲田大学出版部、1998年）である。それに続く第二のロシア文学側からの比較文学研究への貢献が本書『ロシア文化の森へ』である。

評者は『トルストイと日本』の続篇として柳教授のツルゲーネフやチューホフに関する積年の比較文学的研究の集大成の出版を予期していたが、予想に反して本書が先に産まれた。本書を手にしたとき、最初、この出版は門弟・友人・同僚によって教授にささげられ

た“Festschrift”にちがいない、と思った。もちろん、“Festschrift”の意義は十分にあるけれども、読みはじめると、企画から出版までの創意が編著者にあることが明白となる。したがって、本書は名実ともに柳教授の“編著”である。

「早稲田大学比較文学研究室」の発足当初からの研究員である柳教授のロシア文学および比較文学研究の発展は同研究室の歴史と軌を一にする。しかし「早稲田大学比較文学研究室」は研究機関であって教育機関ではないので、後続の若手研究者の育成という面では、東京大学大学院の比較文学比較文化の専修課程に比して、恵まれた環境ではなかった。機関誌の『比較文学年誌』も、本書発行の2001年初頭の時点で36号を数えるに至ったが、その存在は大学紀要のゆえに一般の目には埋もれがちである。

『比較文学年報』には創刊号から最新号までロシア文学・ロシア文化に関する数々の優れた論文が掲載されてきたが、世に知られるところ少なかった。柳教授の意図が、『比較文学年報』をはじめ、他の大学紀要ないし研究誌に収録されたまま埋もれている論考を掘り起こして精選し、さらに未刊行の（と思われる）若手研究者の業績をも合わせて、一本の論文集を編み、比較文学・比較文化の学としてのロシア文学の研究の成果を世に問うことにあったことは、本書の序文からも明らかである。

学術書出版の困難な昨今の状況にあって、この大巻を編集・刊行された柳教授の研究者としての情熱と功績は言うにおよばず、若手研究者の育成に絶えず心をくわいてこられた教授の教育者としての熱意に、評者は、なによりもまず、敬意を表したい。

本書には36名の執筆者の論文が集成されている。書の構成は二部から成り、第Ⅰ部「ロシア文化のなかのヨーロッパ」には21篇、第Ⅱ部「日本とロシア——交流のなかで」には15篇の論考が収められている。執筆者のなかには稲門学派に属するとは思われない学究も若干名含まれているが、柳教授の企画に協賛して論文を提供している。しかし、それらの“ゲスト”論文は「早稲田大学比較文学」の流れの中に違和感なく溶け込んでいるばかりでなく、収録の諸論文を有機的に関連づけるうえで重要な役割を果たしている。編者の編集能力が有効に機能している、と言うことができる。

全般的な印象から言えば、本書には若々しい活力と情熱がみなぎっている。その瑞々しさの由来を思うに、ひとつにはこの学問分野の若さであり、もうひとつは、総じて、執筆陣の若さである。執筆者の半数以上は現

在では老熟の学匠ないし練達の中堅研究者と言える人々であるが、収録されているそれらの学究たちの論文は大体において比較的若い頃の労作である。若き論考を揃えて文集に編むことを可能にしたのは、個々の論文の正当な価値を問う編集者の批判精神と自負心であろう。日進月歩の学問世界において、幸いにも、例外的に、文学研究は時流に押し流されない耐久性・永遠性を失わずにいる。それは文学作品と同様の価値をもつ文学批評というものがあるからである。文学研究にもときとして“珠玉”と言える論文作品がある。評者は、本年1月26日に行われた柳教授の最終講義「早稲田における比較文学研究について」を拝聴する機を幸いにして得たが、その折り、評者の記憶に間違いがなければ、教授はそのような“珠玉”の論文の一例として平岡昇氏の『日本におけるルソー——その文学的影響について』（『プロポ2』白水社、1982年）を挙げられた。

そのとき評者は、柳教授の真意はロシア文学＝比較文学研究の珠玉論文の“アンソロジー”を編むことにあったのではないかとふと思ったのである。そう思って本書を見直すと、これは単なる若手研究者たちの業績づくりのための論文集ではなくて、それ自体において文学性をもつ作品集に見えてくる。

評者は本書に収録されている36篇の論文をひとりひとり通読したが、個々の専門論文について査読的な論評をする意志はなく、またその力もない。論集を“作品集”として概観したうえでの鑑賞批評的な読後感を述べるにとどめたい。

第Ⅰ部「ロシア文化のなかのヨーロッパ」の冒頭に位置する川端香男里論文「ロシアとヨーロッパ——ロシアの「他者」としての西欧」は18世紀以降のロシア文化のなかに息づく「西欧」を捉える第Ⅰ部の論文群に展望を与える問題設定の役割を果たしている。18世紀ロシア文化に関する3本の論文がそれに続く。佐々木精治論文「過渡期のトレジアコフスキー——『アルゲニダ』序文から『チレマヒーダ』序文へ——」はフェヌロン『テレマック』およびJ・パークリ『アルジェニス』を翻訳・摂取するにあたってのトレジアコフスキーの叙事詩論の発展を論じた重厚な論考。藤沼貴「ロモノーソフのモザイク画」はロモノーソフのモザイク画の稚拙美の文化史的意義を追究した論考であるが、美術館・博物館・教会堂めぐりをする旅人の眼をとおして語られる鑑賞と批評の手法が美事である。杉野由紀「チュルコフの『からかい屋あるいはスラヴのスカースカ』におけるダンテの『神曲』受容について」は日本ではほとんど未開拓な分野への真摯な取り組み

の姿勢を見せる。

柳富子「チェーホフとモーパッサン——両作家の類似をめぐって」は外国文学との関係を最も実証しにくいチェーホフの文学をロシアにおけるモーパッサン受容史の中で位置づけ、両作家の死生観・孤独感・時間的推移のモチーフをさぐり、芸術理念と作家意識における両者の類似性を明らかにしつつロシアとフランスの文学交流の事例研究の方法論を提示した基礎的研究であり、第Ⅰ部のロシア文学とヨーロッパ文学の比較研究の指針となっている。この研究の流れに沿う諸論文に、それぞれに異なる主題と独自性をもつことは言うまでもないが、森田敦子「『スペードの女王』と『マクベス』——構造とイメージからみた対比的考察」、坂庭淳史「ロシアにおけるシェリング哲学——その受容と展開について」、佐藤清一郎「信仰の渴望と自我の凌駕——ツルゲーネフの『ステーノ』とパイロンの『マンフレッド』をめぐって」、杉里直人「ドストエフスキーの文学的出発——『ウジェニー・グランデ』の翻訳について」、井桁貞義「シラーとドストエフスキー——問題設定のために」、桜井厚二「ドストエフスキーの作品における「ドン・キホーテ」」、高野雅之「コロレンコとアメリカ」、草野慶子「ウェルズからザミャチンへ——「ネオリアリズム」の誕生」、菊池嘉人「ミハイル・ブルガーコフのモリエール」がある、と評者は見る。

第Ⅰ部には文学にかぎらず、美術・音楽・バレエ等の芸術や哲学の論文が含まれる。

上野理恵「M・ヴルーベリと世紀末芸術——〈西欧〉と〈ロシア〉における女性性の表象をめぐって」は犀利な文学的美術論である。この論文に、藤沼論文にも同様に、図像が入っていないことが惜まれる。おそらく費用上の関係で無理だったのであろうが、然るべき絵図があれば説得力は倍増するであろう。

ロシア歌曲史における日本テーマを論じた伊東一郎「ストラヴィンスキーのジャポニズの一側面——『日本の叙情歌からの三つの詩』の拍節法について」は伊東氏にしか書けない特異な論文であり、たいへん興味ぶかいが、本書の構成の上ではその主題からして第Ⅱ部「日本とロシア——交流のなかで」に置かれたほうが座りがよいように思われるが、第Ⅰ部と第Ⅱ部との橋渡しの役を演じているのは確かである。

長井淳「スクリャービンの《プロメテウス》とオカルティズム」は音楽美学的論文で、オルフェウスの感性の豊かさを感じさせる。

貝澤哉「ベルリンのロシア文学 1921-1923——「ひとつのロシア文学」をもとめて」はパリ以前に亡命ロシア文化の中心となったベルリンを「ソヴィエト文学」

と「亡命文学」が未分化状態で接触する特異な文学現象の場として捉えた論考で、20世紀ロシア文学史を考え直すうえで重要な文献となるであろう。

有名なナボコフもベルリン経由の亡命作家である。鈴木正美「『オーレリアン』あるいはナボコフ」はベルリンを舞台としたナボコフのロシア語による初期作品『オーレリアン』における蝶のモチーフを中心に関連するヨーロッパ文学のモチーフと作者の博物誌的知識の作品への反映を論じた異色の論文。

第Ⅰ部の主題は「ロシア文化のなかのヨーロッパ」であるが、一方においては、「ヨーロッパ文化のなかのロシア」という視点の導入も必要であり、その視点から読むべき論文に村山久美子「ロマン主義バレエの萌芽を導いた振付家ディドロ」と小山ブリジット「イヴァン・ツルゲーネフとエドモン・ド・ゴンクール」（フランス語論文ゆえに巻末に収録）の2点がある。両者とも、ヨーロッパという文化脈絡でロシアを捉える観点に立った好論文である。

第Ⅱ部を構成する論文群は、日露比較文学と日露文化交流史の2つに大別することができる。

日露比較文学のグループに属する論文は、靱内裕子「島崎藤村とツルゲーネフ——藤村が聞いた音、見た自然」、中本信幸「『どん底』の太陽——テキストロジーの立場から」、塚原孝「明治期のアンドレーエフ受容史の一側面——『早稲田文学』『趣味』を中心に」、源貴志「神経衰弱の文学——谷崎潤一郎とロシア文学」、八島雅彦「日本におけるトルストイの原像」、秦野一宏「宇野浩二・芥川龍之介とゴーゴリの『外套』——「ちっぽけな人間」をめぐって」、佐藤千登勢「日本の形式主義に与えたシクロフスキーの影響の一断面——横光利一と中河与一をめぐって」、笠間啓治「小説『道標』の人々——1927/28年モスクワ(2)」、佐々木寛「日本におけるバフチンの移入について」、国松夏紀「芥川龍之介におけるドストエフスキー——遺稿『闇中間答』を中心に」、田村充正「ロシア語訳『源氏物語』——立ち現れる〈声〉たち」の12篇。

受容・影響関係に重点を置いた論が主流となっており、いずれの論文も資料に基づく精緻な跡づけがなされた手堅い論文である。

日露文化交流史研究に属する論稿は、南平かおり「新宿中村屋女主人 相馬黒光——ロシアとの出会い」、小林深「ローゼンベルク研究に向けて」、中村喜和「鳴海完造のロシア——訪ソ日記から」、アンドレイ・コレンコ著・沢田和彦訳「1869, 1870年のペテルブルグ農・林業大学の思い出」であるが、この4篇は評者には最も面白く読めた。

個人の論文集は別として、多数の寄稿を集めた研究論文集で全体を面白く読めるものはきわめて少ない。本論文集は例外中の例外に属する。本書を読みながら、「文学研究とは何か」と自問してみた。セルビア文学史上傑出した存在にモダニズム（表現主義）から出発した詩人・作家ミロシュ・ツルニャンスキイ（1893-1977）がいる。ツルニャンスキイの研究家に詩人で文学者のアレクサンダル・ペトロフ（1938-）がいる。ペトロフの著書『ツルニャンスキイの詩とセルビア詩歌』（1971年）はペトロフがザグレブ大学に提出した博士学位論文で、ツルニャンスキイの詩の形式と内容を緻密に分析し、セルビアの詩歌の伝統のなかで位置づけた研究である。この論文は、当然、存命中のツルニャンスキイの目にとまった。その論稿を読んだツルニャンスキイは「私の文学上の最大のライバルが現れた」と感嘆した、と言う。この話は評者が1988年にペトロフ本人から聞いたもので、詩人特有の自惚れはあるとしても、再版本（1988年）を読むかぎり、ツルニャンスキイの詩の研究の最高水準を示す論文であると同時に気品をそなえた文学作品となっている。

論文にも読者がいる。学術誌のレフェリー制という忌むべき“検閲制度”が新奇な術語の氾濫する、やたらに難解な論文を産み出しているような気がする。研究対象に応じて内容が難解なのは仕方がないが、無味乾燥な文章は読者を惹きつけない。それ自体文学作品とは行かないまでも、せめて艶のある文章で書かれた論文であるならば、文学的な生命力を失わない。その良い見本は、どれと名ざすことは控えるが、本書の中にいくつか見出される。

本書はいみじくも『ロシア文化の森へ』と題する。ロシア語の諺に“Чем дальше в лес, тем больше дров”「森の奥へ行くほど薪が多くなる」と言う。森に奥深く入るほど収穫も多いが、困難な問題も多くなる。森は文化を拒否する異界であるから用心が要るが、大胆な知的好奇心をもって“дремучий лес”にさらに深く踏み入った成果を本書につづくものとして期待したい。

(くりはら しげお・創価大学)

中村喜和著

『ロシアの風—— 日露交流二百年を旅する』

風行社, 2001年, 327頁+ix

和田 春 樹

中村喜和さんのロシア・エッセイ集は、すでに本書で二冊目である。前著『遠景のロシア』がロシア史上の昔の人物、古都めぐり、フォークロア、風俗といった話題を集めていたのに対して、本書は第一部が「ロシアの人びと」として中村さんが直接間接に交流した同時代のロシア人、第二部が「文学・フォークロア・書物」で、第三部が「ロシアと日本人」という構成である。文章も自在になり、味わいがますます出てきて、読み進めると、中村さんの世界にひきこまれる感がある。

第一部では、まず対日使節レザーノフが登場する。彼は昔の人だが、彼の回想が新たに発掘され、ロシアで公刊され、日本で大島幹夫氏の訳で岩波文庫に収められたことが紹介されている。そこで航海中に艦長クルーゼンシテルンと対立し、彼のいじめによりレザーノフが苦しめられたことが語られている。ロシアでも露米会社の新しい研究の中で、レザーノフの名誉回復がなされているとされている。結論は、司馬遼太郎氏の『ロシアについて』でレザーノフが酷評されていることへの批判である。レザーノフがサンフランシスコの警備隊長の娘と恋におちるほどの魅力的な男であったという話も含めて、このすべてに賛成だが、やはりレザーノフ問題の最大のポイントは、長崎に六ヶ月滞在して、何も与えられずに追い返された以上、彼が立腹したのも当然だということであろう。

つぎにピリニャークと秋田雨雀の「ひびわれた友情」。これは第三部の「鳴海蔵書の成立事情」と直接的につながっている。ともに鳴海完造の日記という興味深い資料をもとにしている。秋田雨雀と鳴海完造は1927年にピリニャークに会って反発した。社会主義に進むこの国にいるブルジョア分子とみたのである。他方米川正夫は社会主義者ではなかったので、ピリニャークと深い親交を結んだ。となると、この話はやはり日本人のロシア観の話である。だとすれば、第三部にもっていったって、秋田と鳴海が三七年の大テロルでピリニャークが逮捕処刑されたことに対してどう反応したかを書く方がよかったのではないか。ロシア人ピリニャークの運命について重点を置くのなら、陸軍大学ロシア語教官米川正夫との関係がピリニャークを日